

先行提示する情報のなじみ深さと後続課題の成績との関係

早瀬 聡哉

本研究は、クリエイティブシンキングを制限する要因のうちの「アインシュテルング効果(Einstellung effect)」に着目したものである。アインシュテルング効果とは、問題に向き合わせたときに、あらかじめ習得されていたなじみ深い経験や知識が、新たな解の発見を妨げる傾向である。アインシュテルング効果に関する先行研究では、いくつかの方法論的な違いはあるが、いずれの研究においても、参加者にとってなじみ深い解によって「適切であるがなじみ深くない解」を見つけるのを妨げるという共通点が強調されている。しかし、Cyril & André(2016)は、なじみ深くなくありそうにない解があらかじめ提示された場合であっても、参加者がより明らかで正しい解を見つけることを妨げうる、すなわちアインシュテルング効果が生じるとした。しかし、Cyril & André(2016)にて提示された「なじみ深くない解」は、参加者にとって「なじみ深くない」ものであったかの確認がされておらず、彼らの実験で生じたアインシュテルング効果が本当になじみ深くない解によるものなのかは検証不足であった。また、Cyril & André(2016)の研究の通り「なじみ深くない解」によってアインシュテルング効果が生じるのであれば、参加者が解に対して感じる「なじみ深さ」の程度の違いによって、固執の程度の違いが異なる可能性があるが、この点も検討されていなかった。そこで、本研究はCyril & André(2016)の研究にて検討された「なじみ深くない解」とアインシュテルング効果の関係について、より詳細に再検討を行った。具体的には、解のなじみ深さの程度を操作し、アインシュテルング効果の程度の違いを検討することを目的とした。

実験 1 では、Cyril & André(2016)の研究にて行われたカードマジックのタネを見破る課題を本実験用にアレンジを加え、より複雑にした課題を実施した。実験の結果、課題の正解率に関しては、マジック実施直後に正しいタネを見つけたことができた参加者について、なじみ深さの違う群間で有意差はみられず、なじみ深さの程度の違いによるアインシュテルング効果の程度の違いはみられなかった。一方で、なじみ深い解が否定された場合、アインシュテルング効果は依然として生じたが、なじみ深くない解が否定された場合、アインシュテルング効果は消滅したことから、先行提示されていた解が否定された際の固執の程度は、なじみ深い解の方が強いことが示された。しかし、実験 1 では、なじみ深さを事前の予備実験で確認したにもかかわらず、実際に実験ではそれが逆転してしまい、結果としても一部逆転してしまっていた。そこで、より解のなじみ深さの程度を明確に操作し、課題の難易度が適切であるかの再検討をする必要があると考えられた。

実験 2 では、実験 1 の結果を踏まえて、先行提示されるなじみ深い解の教示の内容が変更され、課題の内容が簡略化された。実験の結果、課題の正解率に関して、なじみ深い解を提示する群において正解した人数が有意に少なく、何も提示しない群において正解した人数が有意に多くなった。また、不正解であった参加者の解答内容も考慮して、なじみ深くない解を提示する群においてもわずかではあるがアインシュテルング効果が機能していたと考えられた。以上より、アインシュテルング効果はなじみ深くない解を提示した場合にも生じうるが、固執効果はなじみ深い解を提示したときよりも弱いものであるということが示された。しかし、Cyril & André(2016)の実験では、本実験と同様の解を先行提示したにもかかわらず、なじみ深くない解を提示する群での正解率が本実験と比べて著しく低くなっていたことから、なじみ深くない解を固執させることは、なじみ深い解ほど単純なものではなく、様々な要因に影響されるものであり、なじみ深い解に比べて一様に固執させることは難しいということが示唆された。(安全行動学)